

2021年度 学校評価（自己評価）報告書

	評価単位	評価のまとめ
教育課程	1. 教育目標	<ul style="list-style-type: none"> ・教育目標を「子どもへの願い」としてから2年が経過し、一人ひとりの教師が、「子どもへの願い」を意識に置いた実践を心がけるようになってきている。 ・「子どもへの願い」を保護者とも共有していかれるように、引き続き、対話的な関係づくりに配慮する。
	2. 教育課程の編成	<ul style="list-style-type: none"> ・教育課程に基づいた実践を行い、「遊びと生活の履歴」を作成し、学期ごとの振り返りをする中で、子どもたち一人ひとりの経験や育ちを捉えなおしたり、次への見通しをもつことにつながった。 ・「入園接続期カリキュラム」及び「幼小接続期カリキュラム」の作成を試み、キーワードやその時期を支える教師の関わりや環境構成について整理することに着手した。
	3. 年間授業日数・時数 保育時間 弁当のある日	<ul style="list-style-type: none"> ・週4日の弁当を実施できた5歳児にとっては年間を通して生活の安定が保障できた。他学年ではやむを得ず、例年に比べ弁当の回数は減ったが、感染症拡大防止に伴う安全確保のための方策としては、保護者からの一定の理解と協力を得られた。 ・入園当初の子どもたちにとっては、少人数での保育が園生活に慣れる上で有効であることも実感され、改めて、各時期の子どもに即した保育時間を検討する必要性について考えるに至った。
	4. 教育活動とその成果 計画 教材 環境構成	<ul style="list-style-type: none"> ・1枚の用紙に学年担当の教師が記録を連ねていく「対話的記録」は、翌日の保育や子ども理解につながっている。また、保育後の消毒作業や清掃の時間も教師間の対話の時間になっている。 ・TTの教諭が学年裁量で勤務時間を延長できたことで、学年間の話し合いが密になり、子どもへの関わり方や保育の見通しを共通にもつことが可能になった。 ・他学年との話し合いや非常勤教師も交えての拡大打合会は、互いの様子を知る機会となり園全体での保育体制作りに役立っている。
	5. 行事 式 誕生会 運動会 遠足 もちつき等	<ul style="list-style-type: none"> ・感染拡大防止の観点から中止せざるを得ない行事もあったが、改めて行事の意義を考える機会となった。 ・密を避ける会場設営や実施方法の工夫を図りつつ、子どもたちが学期の節目や季節を感じる体験ができるようにした。 ・保護者参観の運動会は今年度も中止となったが、子どもたちの願いに添った子ども主体の運動会を模索し実施することができたことは有意義であった。しかし、保護者からは、園の様子を知る機会として、運動会等の参観希望の声が多く聞かれた。 ・誕生会や創立記念の集いなど、園全体での集会の場が減っている中で、改めて異学年で共通の経験をするこの意味について問い直す機会となった。 ・行事の延期に伴い、行事と行事の間隔が狭まり、保育の組み立てが難しくなることがあった。次年度は見通しを持った計画の必要性を感じた。
	6. 進路指導	<ul style="list-style-type: none"> ・園としての考えを共通理解し、年長組の生活や年長児一人ひとりを全職員でフォローする体制は、引き続き取ることができた。 ・書類作成は、全職員の協力体制の中、慎重に進めた。 ・個人面談、説明会等は、感染症対策に努めつつ、滞りなく進めることができたが、進路選択の幅を広げ、保護者と共に子どもにとってのより良い進路を考えていく関係づくりは、引き続きの課題である。 ・幼小接続や保護者との信頼関係の構築という観点から、幼小連絡進学の現制度では困難さを伴う点が多い。
	7. 研究・研修 合同研究 全附連 その他の研修	<ul style="list-style-type: none"> ・開発研究3年次として、教育目標に基づいた教育課程の編成、入園接続期、幼小接続期カリキュラムの作成を進めた。 ・幼小接続期カリキュラム作成にあたり、附属小学校の教師にアンケート調査を実施した。教育目標「子どもへの願い」が小学校にもつながるものであると賛同を得られた。 ・誕生児の保護者との懇談（ホットモタイム）を継続し、在園の保護者の声を生かした「育児手帖その2」を作成した。入園前の保護者の不安緩和につながるよう、その1と合わせて配布予定である。また、入園前の入構証手続き日に、園の雰囲気を感じたり、教師とやり取りができる場「もうすぐようちえん（仮）」の実施につながった。 ・公開保育研究会については、オンラインでの実施を試みたものの、感染症拡大状況に伴い、やむを得ず中止となった。大学の情報担当の示唆を得ながら、地域の幼児教育施設とつながるような研究の発信のありようを探っていきたい。
A 学校運営（教育課程を支える諸条件）	1. 経営・組織 園務分掌 会議等	<ul style="list-style-type: none"> ・園務分掌は、少ない職員体制のもとで各人が責任をもって執行しているが、オンライン化に伴い、情報担当者の負担が大きい。仕事内容を多くの教員が理解し進めていく体制作りが必要である。 ・懸案事項について、あらかじめ職員に周知することで、会議の場や時間を有効に活用することができた。 ・大学のコロナ対策室と連携を取りながら、安心安全に配慮した教育活動の推進に努めた。 ・勤怠管理システムシステムの導入で、勤務時間担当の負担が軽減された。
	2. 出納・経理 校費 委任経理金 一般・行事	<ul style="list-style-type: none"> ・大学に随時報告することで適性を保つとともに、園内で預かり金の使用状況と今後の用途について検討を重ねることで、保育のより良い使途と活用を目指した。 ・行事の見直し等が進み、次年度の一般教材費の見直しを実施した。 ・今年度は大学から配分された研究費が例年より多くあり、新たにパソコン周辺機器を購入した。今後、ICTを活用し、研究の発信や保育の充実に繋がると考える。
	3. 施設・設備 園舎 園庭 遊具	<ul style="list-style-type: none"> ・園舎内の木製家具の修理や塗り直しによって、園環境が美しく整備され、モノを大切に扱う姿勢へとつながっている。 ・夏休み中の池や東屋コンクリート土台部分及び竹垣の補修、排水溝の整備に加え、園庭の樹木の伐採など、安全安心のための環境改善を実施した。 ・引き続き、密を避けるという制約のもと、遊具の数や配置等子どもとモノとの出会い方や使い方を丁寧に考え直すことができた。
	4. 健康	<ul style="list-style-type: none"> ・巡回指導、スクールカウンセラー、ソーシャルワーカー等、子どもと家庭を支えるネットワークがあることで、保護者対応やケアすべき点を共有でき、保護者、子どもの安定につながっている。 ・登園時の健康チェックなど、家庭と園との協力体制のもと、感染拡大防止のための措置が滞りなく実施できている。 ・園内感染についての対応も、コロナ対策室との連携体制のもと、最善を尽くすことが出来たが、今後の安心できる保育環境の保持、教職員の健康管理については引き続き丁寧に取り組んでいきたい。 ・安心して園生活を送るための消毒作業や保育の変更への対応など、教職員の負担は引き続き大きい。
	5. 安全	<ul style="list-style-type: none"> ・感染症対策に伴う環境安全に関しては、大学のコロナ対策室と連携して、状況に合わせ適切に判断し、対応を重ねている。 ・毎日の消毒作業を通して、遊具の汚れや消耗具合などを日々チェックすることは大切だと改めて感じる事ができた。 ・安全点検日以外でも、日常的に気づいたことは声を掛け合い、施設課に対応を依頼するなどして安全確保に努めた。 ・避難訓練は回数を重ねることで、教職員の意識向上が図られ、子どもたちにもその必要性が伝わっている。 ・収納場所変更に伴い、備蓄品の確認を丁寧に実施。担当教員だけではなく整理や確認を教職員で連携して実施し、共通理解を図りたい。
	6. 情報	<ul style="list-style-type: none"> ・ムードル(Moodle)やウェベックス(Webex)等、情報関係のツールが充実してきたが、更なるセキュリティ管理の必要性を感じる。 ・家庭とのやり取りのツールが増えたことで、便利になった一方、煩雑さが増し、混乱も生じている。発信方法やその活用の仕方については、コロナ対策後も見据えたさらなる検討が必要である。
	7. 開かれた学校	<ul style="list-style-type: none"> ・学校関係者評価委員会、学校評議員会は、オンラインでの実施となったが、活発な意見交換が行われ園運営を見直す良い機会になった。 ・同窓会関係の催しは、催しの持ち方について新たに考える機会をもち、年度内に実施する見通しである。 ・開発研究の運営指導委員の先生方より、他校園の取組や社会情勢など、広い視野での指導をいただいた。 ・いずみナーサリー、文京区立お茶の水女子大学こども園との3園合同研究会を夏休み中期間に開催。北海道大学の川田学先生のご講演後、2歳児～3歳児の子どもたちについての情報交換を実施した。 ・PTA委員会活動は、バザーやもちつきなど、昨年に引き続き活動自体が中止になり、次年度へ向けての引継ぎに難しさを抱えている委員会もあり、引き続き、園と保護者との協力体制が求められている。
	8. 入園検定	<ul style="list-style-type: none"> ・WEB出願手続き等、業者委託することで、一気にオンライン化を進めることが出来たことで、在園児の保育日数の確保につながった。 ・募集要項頒布については、WEBシステムの利用の仕方が煩雑であり、業者に相談しながら改善に努めた。 ・年明け後の入園辞退者が例年に比べ多かった。補欠人数の見直しなど、次年度に向けて検討したい。

	9. 保護者との連携 保護者会 ボランティア 面談 つばみ会	<ul style="list-style-type: none"> ・制約の多い中、園と相談しながら工夫して、保護者が主体的にPTA活動を進めてくださった。昨年に引き続き、大学の広い部屋を借りての委員会開催、PTA発信のMoodleの掲示板の活用など情報共有を工夫した。 ・面談は対面と電話利用とを併用して実施した。懇談会は、広い空間で、座席の配置や換気に配慮し、対面でのやりとりを重視した。 ・学年だより、月ごとのお知らせの発行、Moodle掲示板の発信、緊急メールなど、情報発信のツールが増え、便利になった反面、煩雑さを訴える保護者の声も聞かれる。 ・写真記録のファイルや掲示板、学期を振り返るスライド上映などは、子どもの様子や生活を知る機会になったという保護者からの声が多い。 ・保護者一人ひとりの対話を意識することで、園の様子が分からないという不安の解消、「わからなさ」の共有等、共に考えあう関係作りに努めた。 ・親子遠足、保護者ボランティアなど、保護者同士がつながる機会や保育に参加する機会が減っていることの影響は大きい。次年度以降の保護者間の交流の機会の保障については、引き続きの課題である。 	
B	大学との連携	1. 連携研究	<ul style="list-style-type: none"> ・他附属との連携研究では、園の様子を伝えるとともに他附属の様子を知る機会にもなり、相互理解したことを互いの実践に活かしていけるよう努めた。 ・エシカルラーニング部会では、園の写真記録を利用して、園の暮らしを中高生と共有したり、中学生の取組に保護者が感想を寄せたり等、附属間の交流を行った。 ・附属小学校低学年担任との話し合いは、入学後の子どもたちの様子を知るとともに、幼小の接続を意識して子どもたちの育ちを考える機会となった。また、小学校教師に園の研究に関するアンケート調査を実施したことは、接続期カリキュラム作成に役立った。 ・学内の文京区立お茶の水女子大学子ども園、いずみナーサリーとの三園合同研究会も実施し、2歳児及び3歳児の研究を進めた。 ・理系女性教育開発共同機構との連携で、今年度も「サイエンス講習・研修会」をオンラインで実施した。園児も楽しめる内容で、時間や人数の制限がなく視聴でき、好評であった。
		2. 授業交流 大学・高校の授業観察	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども学フィールドワークでは、学生の健康チェックを徹底させることで、園内外の観察を実施した。 ・子ども学フィールドワークの振り返りは、教員の人数を制限したうえで、三園そろって対面でのやりとりができた。観察した上での学生からの率直な感想や意見を聴くことが出来た。それぞれの園の教育理念を伝えつつ、子ども理解について深まる話し合いの場となった。
		3. 教育実習	<ul style="list-style-type: none"> ・学生の健康チェックを徹底し、前期、後期と例年通りの実施ができた。学生が園の生活を感じ、関わりの中で、その時期の子どもたちの姿を知ることが出来るよう努めた。
		4. 専門委員会	<ul style="list-style-type: none"> ・職員会議で、各専門委員会での議事録を共有し、検討内容等、共通理解を図った。 ・オンライン開催やメール会議は、働き方対策として、今後も継続を期待する。
		5. 大学の講義担当	<ul style="list-style-type: none"> ・保育内容指導法(表現I)は、ハイブリッドで実施したが、対応等で困難さを伴った。 ・家庭看護学の授業は、幼小中高の4人の養護教諭で分担して取り組むことで、負担の軽減が図れた。
		6. インターンシップ	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度は希望者1名を受け入れた。熱意ある学生のインターンシップは、双方にとって有意義である。
社会貢献		1. 参観・研修受け入れ 国内・国外の参観	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度も、継続中の調査研究のための参観以外は、一部、少人数の受け入れにとどめた。 ・海外の参観受け入れは実施できなかった。平穏な状態に戻り、グローバルな貢献がまたできるようになるとよい。
		2. 公開研究会開催	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度は、2月にオンライン開催を予定し、そのための準備を大学の情報担当と進めてきたが、園内の感染状況に鑑み、やむを得ず中止とした。
		3. 現職研修	<ul style="list-style-type: none"> ・港区研究会(神奈川)及び、中堅幼稚園教諭等資質向上研修(栃木)の講師として現職研修に協力した。
		4. 途上国支援	
		5. 出版活動	<ul style="list-style-type: none"> ・「保育手帖その2」の作成を在園の保護者の協力を得ながら進めることが出来た。新入園の保護者には入園前に配布する予定である。 ・文部科学省開発研究第3年次の報告書に関しては、教育目標に基づいた教育課程他、入園接続期及び幼小接続期カリキュラム、各学年の遊びと生活の履歴などを資料に、今年度の取り組みと4年次の課題を整理し、まとめた。
		6. 各種研究会への 協力・支援	<ul style="list-style-type: none"> ・オンラインによる研究会への参加など、園全体及び各自で研修に主体的に参加した。園内研究会等で、互いの学びを共有できる場を設けることについては、引き続きの課題である。 ・保育者養成校、他大学の外部講師他、事例提供等に協力した。
	7. その他	<ul style="list-style-type: none"> ・座談会(雑誌：保育ナビ)の参加など、倉橋協会の立ち上げに協力した。 ・感染対策に配慮しつつ、歴史的資料の整理等を再開した。また、博物館へ写真資料を提供した。 ・園の歴史や資料の整理の仕方について、担当の先生方から学ぶ機会を得られたことは有意義であった。 	

2021年度 学校評価(自己評価)まとめ(・成果と*課題)

<教育課程>

・各教員が「子どもへの願い」(教育目標)を実践につなげ理解していることを受け、教育課程を教育目標に即した形に編成し直したことで、より子ども理解や保育内容の充実につながるものになった。

・学内のこども園、いずみナーサリーとの三園合同研究会を実施し、2歳児及び3歳児の理解を深めた。

・今年度も新型コロナウイルス感染症対策に伴い、保育時間や行事等、変更せざるを得なかったが、感染対策に配慮しつつ、内容を工夫した実施を試みたり、面談や懇談会など、対面での実施を増やした。大学のコロナ対策室と連携し、園内の感染状況を保護者に伝えながら、安心安全な園生活が保障できるよう努めた。

*保育時間や行事の変更等、子どもたちの園生活に及ぼした影響については、今年度の取り組みを省察し、次年度につなげていく。

*園の教育理念を保護者に分かりやすく伝えるよう工夫し、子どもを中心に、園と家庭とが横並びで子どもの育ちを支えていく対話的な関係づくりに努める。

<園運営>

・運営基金を有効活用し、園庭の池や東屋土台の改修、園庭樹木の剪定、園舎内の木製備品等の修理・改善、を行うことで園環境の整備を図った。

・スクールカウンセラー、ソーシャルワーカー等、家庭と子どもを支えるネットワークの定着が、園運営の安定につながっている。

・勤怠管理システムの有効活用により、勤務時間担当教員の負担が軽減された。

*感染対策下においても、保護者が安心して子どもの姿や園の様子を知る機会を設け、保護者と園、保護者同士のつながりが持てるような工夫をする。

*保護者への情報伝達ツールの増加については、その利便性と煩雑さについて、保護者の意見を聴きながら、整理し、よりよい活用法を工夫する。

<大学との連携>

・大学の講義に積極的に協力し、学生の実践的な教育の場となるよう貢献した。

*お茶の水女子大学学校教育研究部発信による本園研究のデータベース化をさらに進めていく。

<社会貢献>

・各地域の研究会、養成校や他大学の講義に外部講師として積極的に協力することで、学んだことを園の取組に活かすよう努めるのと同時に、本園の教育理念や研究について伝える機会とした。

・例年より少なかったが、本園の歴史や教育に関する資料提供等の依頼があり、発信できた。

*公開保育研究会をはじめとした全国規模の研究発信の他、地域の幼児教育施設と情報交換や意見交流ができるよう、オンラインの活用も視野に検討、実施していく。

*今年度も昨年に続き、JICAをはじめとし、海外からの研修を受け入れることができなかったが、今後も日本の保育の特徴を発信し続けるのと同時に、子どもたちにとっても国際交流の場となるよう努める。